九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『資本論』の沙翁引用 : 商品と貨幣の非対称性

福留, 久大
九州大学 : 名誉教授

https://doi.org/10.15017/2186194

出版情報：經濟學研究. 85 (4), pp.119-136, 2018-12-25. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

（研究ノート）

『資本論』の沙翁引用

――商品と貨幣の非対称性――

福　留　久　大

(1) 資本論と真夏の夜の夢
(2) 商品と貨幣の優劣関係
(3) 貨幣の直接交換可能性
(4) 分業と商品販売の困難
(5)『夏の夜の夢』の主役
(6)『夏の夜の夢』の哲学
(7) 流通必要貨幣量の観念
(8) マルクスの非凡と平凡

資本論と真夏の夜の夢

『資本論』第１巻第１章第３節「価値形態または交換価値」と第２章「交換過程」とにおいて、商品形態からの貨幣形態の分化発生が説明される。続く第３章「貨幣または商品流通」において、商品から分化発生した貨幣の機能とそれに基づく商品の流通が解明される。その第２節「流通手段(Zirkulationsmittel)」は、三つの項から構成されている。すなわちａ項「商品の変態（Die Metamorphose der Waren)」、ｂ項「貨幣の通流（Die Umlauf des Geldes)」、およびｃ項「鋳貨、価値章標（Die Münze. Das Wertzeichen)」という三つである。その第一の項「商品の変態」で、マルクスは、「商品」と「貨幣」を擬人化し、商品の貨幣に対する恋慕あるいは片思いを、こう記述している。

〈Man sieht, die Ware liebt das Geld, aber „the course of true love never does run smooth“.[41]〉[1]

〈人が知るように、商品は貨幣を恋い慕う、だが「真の恋が滑らかに進んだためしはない」[(41)]〉[2]。

この一文に、[41]（41）として、次のような註記が添えられている。

[41] „*the course of true love never does run smooth*“（„der Weg wahrer Liebe ist niemals eben“）― Shakespeare, „Ein Sommernachtstraum“, 1.Aufzug, 1.Szene.〉[3]（*ibid*., S.849）。

（41）「真の恋が滑らかに進んだためしはない」（„*the course of true love never does run smooth*“）― シェ

1）Karl Marx, *Das Kapital*, Erster Band, Kar Marx Friedrich Engels Werke, Band 23.Dietz Verlag, Berlin, 1962. 18. Auflage 1993. S.122)。マルクス・エンゲルス著作集（日本での通称は「全集」）第23巻、マルクス『資本論』第１巻を本稿における引用の基本とする。

2）マルクス著岡崎次郎訳『資本論』第１巻第１分冊（大月書店、1972年刊）194頁。

3）Marx, a.a.O. S.849.　『資本論』へのシェイクスピア関連引用は16件ないし17件に及ぶが、多くは独逸語に翻訳した引用であるなかで、ここだけが英文のままの引用であること、しかしその英文がシェイクスピア原文と微妙に異なること、その他この引用に関わる技術的事項については、福留久大「『資本論』の沙翁引用―商品は貨幣を恋い慕う」（九州大学経済学会『経済学研究』第84巻第４号、2017年12月刊）の「マルクスの引用の誤記」の節（78-81頁）で言及している。

イクスピア『夏の夜の夢』、第1幕第1場[4)]。

この注記に基いて、シェイクスピアの原作を探ると、次の一文に出会うことになる

“Lysander:　Ay me! for aught that I could ever read,
Could ever hear by tale or history,
The course of true love never did run smooth;”
(A Midsummer-Night’s Dream, Act 1 Scene 1)。

坪内訳「ライサンダー：嗚呼々々！　書（ほん）を読んでも、
話や歴史で聞いたところでも、
真実（ほんとう）の恋といふものは、決して都合よく行ったことはないらしい。」
(真夏の夜の夢、第一幕第一場)[5)]

土居訳「ライサンダア：あゝ、あゝ、今迄私が本で読み、
物語や話に聞いた限りでは、
誠の恋が平かに進んだ例がない。」
(夏の夜の夢、第一幕第一場)[6)]

ライサンダーが、「真実の恋といふものは、決して都合よく行ったことはないらしい」と嘆いたのには、次のような背景があった。ラム姉弟『シェイクスピア物語』の「真夏の夜の夢（A Midsummer Night’s Dream）」から引用する。「かつてアテネに、市民は自分の娘を彼らの好みの人物と強制的に結婚させる権利を持つ法律があった。娘が父親の選んだ男を夫にするのを拒んだ場合には、父親はその娘をこの法によって死刑に処することもできた。だが父親は自分の娘が多少は反抗するとしても、その死を望んだりしないのが常なので、アテネの若い女性たちは両親からこの法の脅威で脅されることはしばしばあったが、死刑にまで至ることは無かった。しかし、僅かに一度だけ、老貴族イージアス（Egeus）が、アテネ大公シーシアス（Theseus）のところに、訴え出たことがあった。その娘ハーミア（Hermia）が、アテネの青年貴族ディミートリアス（Demetrius）との結婚を命じられたにもかかわらず、ライサンダー（Lysander）というアテネの若者を愛しているために、父親の命令に従うことを拒否したのである。イージアスはシーシアス大公の裁判を求め、自分の娘にその残酷な法律の適用を願い出た。ハーミアは、父の命令に従えない理由として、ディミートリアスは以前自分の親友ヘレナに愛を告白していたこと、ヘレナもディミートリアスを気も狂わんばかりに愛していることを申し

4）岡崎、前掲訳書410頁。
5）『シェークスピア著・坪内逍遥訳『ザ・シェークスピア―全戯曲（全原文＋全訳）』第三書館、1989年刊）81頁。
6）土居光知訳『夏の夜の夢』岩波文庫、1940年刊、38頁。なお Midsummer-Night は、Midsummer- Day つまり夏至節（夏至祭）が祝われる6月24日、その前夜を意味する。したがって必ずしも盛夏の夜、真夏の夜とは言えない（土居訳書5頁）。坪内訳書が作品名を「真夏の夜の夢」としたのに対して、土居訳書が「夏の夜の夢」と訳したのは、その事実に基づくと考えられる。多少詳しくは、前掲拙稿81頁参照。小稿では、表題や見出しを（『』などの括弧類もそれぞれ一文字と見なして）十文字に揃えたい意向があって、「資本論と真夏の夜の夢」「『夏の夜の夢』の哲学」というように、適宜使い分けている。

立てた。しかしハーミアが父の命令に従えない理由として示したこれらの事柄も厳格なイージアスを動かすには至らなかった（Hermia pleaded in excuse for her disobedience, that Demetrius had formerly professed love for her dear friend Helena, and that Helena loved Demetrius to distraction; but this honourable reason, which Hermia gave for not obeying her father's command, moved not the stern Egeus.）。シーシアスは偉大な慈悲深い大公だったが、国法を変更する権限は持っていなかった。大公にできたのは、ハーミアに四日間熟考する猶予を与えることだけだった。そして四日目の終りにハーミアがまだディミートリアスとの結婚を拒めば死刑ということになったのである」[7]。なお、その猶予期間の終りには、大公シーシアスとアマゾンの女王ヒポリタ Hippolyta（queen of the Amazons）との結婚の大祝賀会が予定されている。

ライサンダーの嘆きの台詞、「真実の恋といふものは、決して都合よく行ったことはないらしい」は、以上の経緯の直ぐ後に配置されている。ただ、上に引用したラム姉弟の「夏の夜の夢」のなかで英語原文を添えた下線部分は、ハーミアの訴えとされているが、シェイクスピア原作では、次の通りにライサンダーの台詞である。

"Lysander. ———— Demetrius, I'll avouch it to his head,
Made love to Nedar's daughter, Helena,
And won her soul; and she, sweet lady, dotes
Devoutly dotes, dotes in idolatry,
Upon this spotted and inconstant man."

「ライサンダー； —— ディミトリヤスは、——彼の面前で断言しますが、
嘗てネダーの女（むすめ）ヘレナに恋をしかけ、
悉く其情（こころ）を得ました。可憐（いぢら）しいヘレナは、
此男を斯様な汚はしい薄情者とは知らず、
真実、誠心を傾け、神を崇めるやうにして溺愛してをります。」[8]

商品と貨幣の優劣関係

Man sieht, die Ware liebt das Geld, aber „the course of true love never does run smooth".
人が知るように、商品は貨幣を恋い慕う、だが「真の恋が滑らかに進んだためしはない」。

商品は貨幣との交換を、つまり商品を販売して貨幣を入手することを、求める。しかし、それは一筋縄では行かない困難なことであって、販売のための種々の工夫・努力が欠かせないことになる。様々の工夫・努力を重ねても販売に成功しない場合も少なくない。逆に、貨幣によって商品を購買することには、一般的に言って、何ら困難はない。「一般的に言って」とは、加増可能性のある商品について

7）Charles and Mary Lamb, *Tales from Shakespeare*.（Everyman's Library）p.18.
8）シェークスピア著・坪内逍遥訳、前掲書80頁。

言えることを意味する。特殊な生産条件に基づいて加増可能性に乏しく増産の困難な商品については、貨幣による購買にも多大な困難が避けられない。その種の特殊な商品を除外すれば、必要額の貨幣さえあれば、何時でも、何処でも、どんな商品でも、入手可能である。商品経済社会に生存する成人ならば誰でも、この平凡な事実は知っている。

だが、何故にこの平凡な商品経済的事実が世界を覆うことになったのか、すなわち、貨幣を持っていれば、何時でも何処でも如何なる商品でも購買できるのに対して、商品を持っていても、望みのままに貨幣と交換できる（つまり商品を売って貨幣を入手できる）とは限らないわけで、貨幣は商品に対して格段に強大な万能の力を持っている、どうして商品はそういう弱い立場に立たされ、貨幣はそういう強い力を有するに至ったのか。

そういう疑問を発すること自体が、当たり前に存在する平凡な事実であるだけに、マルクスの非凡の技と言えるだろう。そして、その疑問に対して有力な解明の道を開いたのも、マルクスを以て嚆矢とすると言えよう。

『資本論』第１巻第１章第１節「商品の二要因、使用価値と価値（価値実体、価値量）」および第１章第２節「商品に表される労働の二重性」は、貨幣未生の世界を検討対象としている。そこにおいては、貨幣はまだ姿を現さず、価値と使用価値の統合体としての商品の姿が見られるだけである。第１節と第２節の検討対象としてそこでの主題を成している商品について見ると、商品には、他商品との交換可能性としての価値と人間の欲求充足性としての使用価値とが二つの要素として包含されている。

マルクスは、後の第５章「労働過程と価値増殖過程」第２節「価値増殖過程」において、「販売を予定されている物品すなわち商品（ein zum Verkauf bestimmter Artikel, eine Ware）」という規定を与えている[9)]。「売るための財貨つまり商品（Goods for sale, commodities）」ということになる。この商品の特質上、商品の使用価値は他人のための使用価値である。「彼の商品は、彼にとっては直接的使用価値を持っていない。もしそれを持っているなら、彼はその商品を市場に持って行かないであろう。彼の商品は、他人にとって使用価値を持っている。彼にとっては、それは直接にはただ交換価値の担い手であり、したがって交換手段だという使用価値を持っているだけである。それだからこそ、彼はその商品を、自分を満足させる使用価値を持つ商品と引き換えに、手放そうとするのである。すべての商品は、その所有者にとっては非使用価値であり、その非所有者にとっては使用価値である」[10)]。

厄介なことには、この使用価値は、個々の商品ごとに質的に異なっており、それぞれの商品に固有に内属している。商品聖書と商品洋酒は、それぞれに異なる使用価値体であって、量的に比較できないものである。その使用価値を必要とする誰かにとって使用価値であり、何時でも何処でも誰に対してでも使用価値であるというわけではない。

こうして、商品は、使用価値としては、それぞれに異質であり、量的に比較し得ないものであって、相互の交換を制約するものとして存在している。それとは対照的に、価値としての商品は、第一義的に、何時でも何処でも如何なる商品とも交換されることを求める存在である。この点で、商品の価値

9）Marx, a.a.O. S.201. 前掲訳書326頁。
10）Marx, a.a.O. S.100. 前掲訳書157頁。

と使用価値は、対立し矛盾する関係にある。このような商品の内在的対立矛盾こそが、交換を切実に求めつつ容易に交換を実現できない基本的理由を成している。この窮地を脱却する道が、商品形態からの貨幣形態の分化発生であり、商品 ── 貨幣 ── 商品という流通経路の形成に他ならない。

貨幣の直接交換可能性

貨幣の強力の根拠についてマルクスに学んだ解明の大筋を辿ってみる。第１章第３節「価値形態または交換価値」と第２章「交換過程」とにおいて、商品形態からの貨幣形態の分化発生が説明される。商品の二要因のうち、使用価値的側面が希薄化し価値的側面が強力化した価値の独立体として貨幣が析出されるのである。その端緒を『資本論』に探ると、「単純な個別的偶然的価値形態」（形態Ⅰ）の分析において、最も単純な価値表現形態として「20エレのリンネル＝１着の上着、または20エレのリンネルは１着の上着に値する」[11] という等式が取り上げられる。この等式は、相対的価値形態にある「商品リンネルの価値が商品上着の身体で表現され、一商品の価値が他の商品の使用価値で表現される」[12] ことを示している。

さらに、「20エレのリンネル＝１着の上着」というのは、リンネル商品の所有者が上着との交換を求めて上着商品の所有者に働きかける過程でリンネル商品の価値を表現することを示すものであって、商品同士の交換を示しているのではない。「一商品Ａ（リンネル）は、その価値を異種の商品Ｂ（上着）の使用価値で表現することで、商品Ｂそのものに一つの独特の価値形態、等価物という形態を押し付ける。（中略－引用者）リンネルは実際にそれ自身の価値存在を、上着が直接にリンネルと交換され得るものだということによって、表現するのである。したがって、一商品の等価形態は、その商品の他の商品との直接交換可能性の形態である」[13] ということになる。相対的価値形態にあるリンネル商品は上着商品との交換を求めながらそれを入手できるとは限らないのに対して、交換を求められた上着商品は、望めば何時でもリンネル商品を入手できる直接交換可能性を持ち得ることが明らかにされる。等価形態に置かれた商品の持つこの直接交換可能性（unmittelbare Austauschbarkeit）こそが、貨幣が商品に対して有する強大な力、何時でも何処でも任意の商品を買い得る力の萌芽形態なのである。ただ、ここで等価形態に置かれた商品上着の持つこの直接交換可能性は、他の異種の商品リンネルに対してのみという狭い限界に限られている。

リンネル商品所有者が他の多くの商品を需要するのに応じて、リンネル商品の価値は他の多くの商品を等価形態に置いた形で表現される。「全体的な展開された価値形態」（形態Ⅱ）が見られることになる。リンネルのみならず多くの商品の所有者がそれぞれに多様な商品を需要すると、多数の「形態

11）Marx, a.a.O. S.63. 前掲訳書93頁。第１章第３節「価値形態または交換価値」と第２章「交換過程」とにおける価値形態論については、福留久大「『資本論』の沙翁引用 ― 価値対象性という概念」（九州大学経済学会『経済学研究』第85巻第２・３合併号、2018年９月刊）の第５節「一章三節と二章の見解」、第６節「学問段階の価値形態論」で、その概略を述べている。ここでは、「直接交換可能性」の形成に焦点を絞ってその要約を試みている。
12）Marx, a.a.O. S.66. 前掲訳書101頁。
13）Marx, a.a.O. S.70. 前掲訳書107頁。

Ⅱ」が展開される、そのなかで商品所有者の多くから共通に需要される商品（例えばリンネル）が浮上する、多くの商品の価値が「一般的等価物」としてのリンネルによって表現されることになる。「一般的価値形態」（形態Ⅲ）の登場である。「一般的等価物」としてのリンネル商品は、相対的価値形態に立つ多くの商品に対して直接交換可能性を発揮し得ることになる。一般的等価物としての適性を満たす商品種類が社会制度的に定着することで「貨幣商品」が特定されて、「貨幣形態」（形態Ⅳ）の誕生となる。

『資本論』第１巻第２章「交換過程」の表現を借りると、次の如くになる。「他のすべての商品の社会的行動が、ある一定の商品を除外して、この除外された商品で他の全商品が自分たちの価値を全面的に表すのである。これによってこの商品の現物形態は、社会的に認められた等価形態になる。一般的等価物であることは社会的過程によって、この除外された商品の独自の社会的機能になる。こうしてこの商品は貨幣になる」[14]。いまや貨幣は全商品に対して「直接交換可能性の形態」となり、商品に対して優越的な力を振い得る立場を確保したことになる。

と同時に、商品の側から見ると、貨幣との交換つまり販売を切実に求めながらもその願いを自力では叶えられず、貨幣の「直接交換可能性」に依存せざるを得ない弱い立場を余儀なくされることになるわけである。

分業と商品販売の困難

商品の弱い立場、商品の販売の困難について、マルクスは、『資本論』第１巻第３章「貨幣または商品流通」第２節「流通手段」a 項「商品の変態」において、商品の「命懸けの飛躍」としてこう述べる。「W － G (Ware ＝商品、Geld ＝貨幣)。商品の第一変態または販売。商品体からの金体への商品価値の飛び移りは、私が別のところで（『経済学批判』のなかで－引用者）言ったように商品の命懸けの飛躍（salto mortale）である。この飛躍に失敗すれば、商品にとっては痛くはないが、商品所有者にとっては確かに痛い」[15]。

この文章に続いて、マルクスは、リンネル織物業を例にとって、分業との関連を重視しつつ、飛躍の失敗の可能性（「危険性」と言うのが正確かも知れない）を、「一、商品の売れない可能性」、「二、売れるとしても実現価格が予定価格を下回る可能性」に大別して、詳述している。（以下の引用部分に見られる分業を軸とする論述については、後の節において改めて検討する）。

「一、商品の売れない可能性」として三事例が挙げられる。第一に、需要側との不適合の事例。「社会的分業は彼の労働を一面的にするとともに、彼の欲望を多面的にしている。それだからこそ、彼にとって生産物はただ交換価値としてのみ役立つのである。しかし、彼の生産物はただ貨幣においての

14）Marx, a.a.O. S.101. 前掲訳書159頁。

15）Marx, a.a.O. S.120. 前掲訳書191頁。マルクスの「命がけの飛躍」論の一部分は、拙稿「『資本論』の沙翁引用―商品は貨幣を恋い慕う」の第５節「商品の命を懸けた飛躍」（87-88頁）で紹介している。ここでは、マルクスが分業との関わりで論述していることに注目して全体を概括する。

み一般的な社会的に認められた等価形態を受け取るのであり、しかもその貨幣は他人のポケットのなかにある。それを引き出すためには、商品は何よりもまず貨幣所有者にとって使用価値でなければならず、したがって商品に支出された労働は社会的に有用な形態で支出されていなければならない。換言すれば、その労働は社会的労働の一環として実証されなければならない。しかし、分業は一つの自然発生的な生産有機体であって、その繊維は商品生産者たちの背後で織られたものであり、また絶えず織られているのである」[16)]。自給生産が姿を消して全面的商品交換が一般化する状況下では、社会的分業の細分化が進むとともに、分業の構成の変動も激しいために、需要との適合の保証はなく、売れない危険性が不断に存在するのである。

第二に、供給側での類似の商品との競争に敗れる事例。「生産物は今日は或る一つの社会的欲求を満足させる。明日はおそらくその全部または一部が類似の種類の生産物によってその地位から追われるであろう」[17)]。

第三に、供給側での同種類の商品との競争に敗れる事例。「労働が、われわれの織職のそれのように社会的分業の公認された一環であっても、それだけでは彼の20エレのリンネルそのものの使用価値は決して保証されてはいない。リンネルに対する社会的欲求には、すべての他の社会的欲求と同じように、その限度があるが、それがすでに競争相手のリンネル織職たちによって満たされているならば、われわれの友人の生産物は余計になり、したがって無用になる。貰い物ならば、いいも悪いもないのだが、彼は贈物をするために市場を歩くのではない」[18)]。

「二、売れるとしても実現価格が予定価格を下回る可能性」として二事例が挙げられる。第一に、競争相手の技術改善によって後進的位置に低下する事例。「仮に、彼の生産物の使用価値が実証され、したがって貨幣が商品に引き寄せられるとしよう。ところが今度は、どれだけの貨幣が？という問題が起きてくる。答えは勿論、既に商品の価格によって、商品の価値量の指標によって、予想されている。」「彼は自分の生産物にただ社会的に必要な平均的労働時間だけを支出したはずである。だからその商品の価格は、その商品に対象化されている社会的労働量の貨幣名でしかない。しかし、古くから保証されていたリンネル織物業の生産条件が、われわれのリンネル織職の同意なしに、彼の背後で激変したとしよう。昨日までは疑いもなく１エレのリンネルの生産に社会的に必要な労働時間だったものが、今日はそうではなくなる」[19)]。技術改善に遅れを取った業者は、先進的業者の技術水準に合わせて低下した価格で販売するしか選択肢は残されていないのである。

第二に、リンネル織物業界における過剰生産の事例。「最後に、市場にあるリンネルは、どの一片もただ社会的に必要な労働時間だけを含んでいるものとしよう。それにもかかわらず、これらのリンネル片の総計は、余分に支出された労働時間を含んでいることがあり得る。もし市場の胃袋がリンネルの総量を１エレ当り２シリングという正常価格で吸収できないならば、それは、社会の総労働時間の

16）Marx, a.a.O. S.120－121. 前掲訳書191-192頁。
17）Marx, a.a.O. S.121. 前掲訳書192頁。
18）Marx, a.a.O. S.121. 前掲訳書192頁。
19）Marx, a.a.O. S.121. 前掲訳書192-193頁。

大きすぎる一部分がリンネル織物業の形で支出されたことを証明している。結果は、それぞれのリンネル織職が自分の個人的生産物に社会的必要労働時間よりも多くの時間を支出したのと同じことである。ここでは、死なばもろとも、というわけである」[20]。社会的分業の不調和ゆえに或る分野で過剰投資が行われた事例である。商品価格を引き下げて売り抜けるか、販路を見いだせずに倒産企業が多発するか、いずれにしろ困難な道しか残されていないのである。

このような例示を以て、「一、商品の売れない可能性」、「二、売れるとしても実現価格が予定価格を下回る可能性」を指摘したマルクスが、その事情を総括するために配置したのが、ライサンダーの嘆きの一句である。

Man sieht, die Ware liebt das Geld, aber „the course of true love never does run smooth".

人が知るように、商品は貨幣を恋い慕う、だが「真の恋が滑らかに進んだためしはない」。

『夏の夜の夢』の主役

シェイクスピアにしろ、マルクスにしろ、その秘めた洞察力には底知れぬものがある。そのことを実感させられる機会を幾度か経験した。マルクスについては、後の言及に譲って、シェイクスピアについて言えば、筆者が『夏の夜の夢』を1980年初夏にロンドンの野外劇場で観たときも、その後台本を通読したときも、自己流に抱いた心象は、ライサンダーとハーミアを主役とする若者の純愛喜劇だった。後に『夏の夜の夢』の真髄として教えられた真相に比較して桁外れに皮相で浅薄な観方であり、読み方だった。

二組の青年男女（ライサンダー Lysander とハーミア Hermia、ディミートリアス Demetrius とヘレナ Helena）が、親の許しを得られない相思相愛のライサンダーとハーミア、ヘレナに恋い焦がれられながらもそれを受け容れずにハーミアに横恋慕するディミートリアスという当初の構図から出発して、駆け落ちを試みてライサンダーとハーミアが郊外の森で落ち合い、それを知ったディミートリアスが後を追いかけ、さらにヘレナまでも森に駆け込んで、舞台は森へと移る。若者四人の恋愛の混線模様を知った森の妖精の王オーベロン Oberon は、妖精パック Puck にヘレナを恋する惚れ薬をディミートリアスの眼に注ぐことを命ずる。しかしパックが間違えてライサンダーに注いだために、混線は一層激化してドタバタ劇が展開する。失敗をオーベロンに叱責されたパックが、二度目は正しく修正薬を操作して、最終的にはライサンダーとハーミア、ディミートリアスとヘレナが、父親イージアス Egeus の許しも得られ、大公シーシアス Theseus の祝福の下で、結婚式の準備に着手する―そういう牧歌的恋愛喜劇だと受け取る傾向を免れなかった。そういう受け取り方は、演劇に素人の筆者に限られないことで、演劇専門家の仲間においても次のような類似の印象が共有されていた事情が窺える。「ずいぶん長い間、演出家たちはこの戯曲をいわばグリム兄弟のお伽話のようなものとして上演することに満足してきた。そしておそらくそのために、台詞の辛辣さや状況の激しさは、舞台では完全に抹殺され

20）Marx, a.a.O. S.122. 前掲訳書193頁。

ることになった。(For a long time theatres have been content to present *Dream* as a brothers Grimm fable, completely obliterating the pungency of the dialogue, and the brutality of the situations.)」[21]。「ロマンティックな伝統の結果として『夏の夜の夢』の森は、いつも一種のアルカディア―牧歌的楽園―と考えられている。(As a result of the romantic tradition, the forest in the *Dream* still seems to be another version of Arcadia.)」[22]。

だがヤン・コットの「ティターニアと驢馬の頭(Titania and the Ass's Head)」と題する『真夏の夜の夢』論(『シェイクスピアはわれらの同時代人』所収)に依れば、実際の『真夏の夜の夢』の真髄は、そういう印象とは真逆に異なっていた。「ペトラルカ的な純潔な愛の理想化との決定的な絶縁を外的に表現したもの(an outward expression of a violent departure from the Petrarchian idealization of love)」、「それこそが真夏の夜の夢であると言える(that seems to us the mid-summer night's dream)」[23]。

イタリアの学者にして詩人、ペトラルカ(Petrarch,1304-1374)が、憧れの理想の女性ラウラ Laura に捧げた純情一路、神聖にして至純の愛の歌、それとは正反対、一八〇度異なる様相を呈するのが『真夏の夜の夢』ということになる。勿論、シェイクスピアにも『ロメオとジュリエット *Romeo and Juliet*』のような清純愛情物語の作品が存在はする。しかし、『真夏の夜の夢』は、そういう路線から大きく逸脱した作品だというわけである。コットは、『真夏の夜の夢』論の表題として、「ティターニアと驢馬の頭」を選択しているが、この表題通りに、森の妖精群の女王ティターニア Titania とパックの魔法によって驢馬の頭をかぶらされた織物職人ボトム Bottom との二者間で繰り広げられる「動物的エロティシズムの世界 animal eroticism」が重要な要素を成すのである[24]。

したがって、牧歌的恋愛物語であれば、当然のこととして、ライサンダーとハーミア、ディミートリアスとヘレナというアテネの貴族の若者たちについて、明確な人物造形が為されるはずである。指摘されると、成程と納得させられるのだが、『真夏の夜の夢』において、「この恋の四重奏を奏でる恋人たちは、互いにほとんど区別がつかない(the lovers in this love quartet are hardly at all distinguishable from one another.)」[25]。それほどに性格描写が希薄であって個性に乏しいことが、彼らがこの戯曲の主役では有り得ないことを物語っている。

「娘たちはつまるところ身長と髪の色が違うだけだ。」「青年たちの違いは名前だけだ。」「四人とも、シェイクスピアの他の人物たちに―これより前の作品の人物たちにさえ―あるような明確さと独自性が欠けている。恋人たちは互いに入れ替わっても構わないのだ。おそらくシェイクスピアは意図的にこうしたのではないか。この暑い夜の事件全体が―この乱痴気パーティで起こったことのすべてが―恋愛の相手を取り替えても少しも構わないという前提から出発しているのだ」。こうした観察を、コットは締め括って言う。「私はいつも、シェイクスピアはどんなことでも偶然に任せたりしない作家だと

21) Jan Kott, *Shakespeare Our Contemporary*. (Doubleday & Company Inc.1965).p.175. 蜂谷昭雄・貴志哲雄・訳『シェイクスピアはわれらの同時代人』(白水社、1968年刊)212頁。
22) Kott, ibid. p.181. 前掲訳書219頁。
23) Kott, ibid. p.180. 前掲訳書218頁。
24) Kott, ibid. p.180. 前掲訳書218頁。
25) Kott, ibid. p.175. 前掲訳書213頁。

いう印象を受ける。（I always have the impression that Shakespeare leaves nothing to chance.）」[26]。

『夏の夜の夢』の哲学

『夏の夜の夢』第一幕第一場の終結部になるヘレナの独白（Helena's soliloquy which forms a code to act one, scene one.）のなかに次のような台詞がある。

"Helena —— Things base and vile, holding no quantity,
Love can transpose to form and dignity.
Love looks not with the eyes, but with the mind,
And therefore is wing'd Cupid painted blind.
—— Wings, and no eyes, figure unheedy haste."

「ヘレナ —— 全く釣り合いの取れていない、卑しく汚らわしいものも、
恋は美しく堂々としたものに変えて仕舞う。
恋は目ではなく心で見るのだ。
だから翼あるキューピッドは盲目の少年の姿で描かれている。
—— 翼があって目が無いというのは、むやみに急ぐことを表わしている。」

この台詞についてコットは次のように解釈する。「この台詞は実は作者自身の独白であり、ブレヒトの劇によくある〈歌（ソング）〉のようなものなのであって、ここで初めて『夏の夜の夢』の哲学的主題が述べられる。―主題とは愛（エロス）と死（タナトス）にほかならない。（It is really the author's monologue, a kind of Brechtian, 'song' in which, for the first time, the philosophical theme of the *Dream* is stated; the subject being Eros and Thanatos.）」[27]。

引用したヘレナの台詞の３行目、「恋は目ではなく心で見るのだ」と言うとき、シェイクスピアは「心（mind）」に如何なる意味を込めたのか？「この文脈では、〈心（マインド）〉とは想像力と欲望とを意味している。シェイクスピアは決して型にはまったやり方には従わない。そこで彼は、愛は美を通して生れ、官能の快楽に高まる（「それゆえ愛は美より生まれて快楽に終わる」）という新プラトン派の弁証法の代りに、欲望を通して生れ、狂気に高まる、醜悪のエロスを持ち出している。（'Mind' in this context seems to mean imagination and desire. Shakespeare usually breaks through stereotypes. For the neoplatonic dialectics of Love born through Beauty and culminating in sensual pleasure（'Amor igitur in Voluptatem a pulchritudine dessinit'）, Shakespeare substitutes the Eros of ugliness, born through desire and culminating in folly.）」[28]。

引用したヘレナの台詞の４行目に記される、「翼あるキューピッド」「盲目の少年の姿」については、

26）Kott, ibid. p.176. 前掲訳書213頁。
27）Kott, ibid. p.179. 180. 前掲訳書217頁、218頁。
28）Kott, ibid. p.180. 前掲訳書218頁。

「ヘレナの独白において、盲目のキューピットは盲目の推進力に―いわば本能のニーケーに、変えられている。(In Herena's soliloquy the blindfolded Cupid has been transformed into a blind driving force, a Nike of instinct.)」と説明される[29]。キューピットは「欲望という盲目のニーケー(the blind Nike of desire)」を象徴するものとされている。余りにも当たり前のこと当然のことゆえに言及が省かれているが、ギリシャ神話のエロス Eros がローマ神話のキューピット Cupid に当たることは言うまでもない。

このようにシェイクスピアの意図を探ってくると、素人の筆者のみならず、少なからぬ数の伝統的演劇専門家が、『夏の夜の夢』という作品でシェイクスピアの目指した表現が「恋愛(ラブ)Love」だと誤解していたこと、「恋愛(ラブ)Love」ではなくて「性愛(エロス)Eros」をシェイクスピアは描こうとしたのだと看取できなかったことが判明する。

前述した、森の妖精群の女王ティターニア Titania と驢馬の頭をかぶらされた織物職人ボトム Bottom との間で繰り広げられる「動物的エロティシズムの世界 animal eroticism」に戻ってみる。この戯曲には並行して進んで行く三つの物語が含まれている。一つは、ライサンダーとハーミア、ディミートリアスとヘレナというアテネの貴族の若者たち、大公シーシアスとアマゾンの女王ヒポリタの婚儀も一括されるだろう。二つは、森の妖精群の王オーベロン、女王ティターニア、妖精パックと「豆の花 Peaseblossom」「蜘蛛の巣 Cobweb」「蛾 Moth」「芥子の実 Mustardseed」の小妖精たちである。三つ目に、大公の結婚祝賀会に際して余興の素人演劇を催そうとして騒いでいる織物職人ボトム Bottom を含む六人の職人たち。

この第二の筋と第三の筋に以下の如き事情で交錯が生じて、ティターニアとボトムの性愛場面が現出することになる。妖精王オーベロンと女王ティターニアは、インド生まれの美少年の取り合いを巡って深刻に仲違いしている。腹いせにティターニアを懲らしめるため、オーベロンは、魔法の草、「あの花の液(しる)を眠てゐる者の瞼に塗ると、男でも、女でも、必ず目の開いた其途端に見た物に見さかいもなく惚れッちまふ(The juice of it on sleeping eye-lids laid / Will make or man or woman madly dote/ Upon the next live creature that it sees.)」[30]、そういう惚れ薬を眠っているティターニアの眼に注ぐ。他方で、パックが、森のなかで芝居の練習をしている職人たちのなかからボトムを引き離し、驢馬の頭をかぶせたうえで、ティターニアの寝所に誘い寄せる。「これこそ夏の夜の夢である言えるのは――少なくともわれわれにとって最も現代的で啓示的な夢と思われるのは――こうして動物性の世界を通過することである。これこそ、戯曲のなかで並行して進んで行く三つの独立した筋を、つなぎ合わせている中心的主題である。ティターニアとボトムは、動物的エロティシズムの世界を、全く文字通りの――それどころか視覚的な――意味で、通過するであろう。(It is this passing through animalty that seems to us the mid-summer night's dream, or at least this aspect of the *Dream* is the most modern and revealing. This is the main theme joining together all the three separate plots running parallel in the play. Titania and Bottom will pass through animal eroticism in a quite literal, even visual sense.)」[31]。

---

29) Kott, ibid. p.180. 前掲訳書218頁。Nike(ニーケー)は、ギリシャ神話の勝利の女神。強烈な力の代名詞として用いられている。そこから転じて、Nike(ナイキ)は米国陸軍の対空誘導弾の名称になっている。

30) シェークスピア著・坪内逍遥訳、前掲書84頁。

『夏の夜の夢』における動物的エロティズムの世界をシェイクスピアは用意周到に構築している。コットは「『夏の夜の夢』の動物の世界は決して出鱈目に作られたわけではない。(The bestiary of the *Dream* is not a haphazard one.)」と述べて、その論拠を挙げている。三つの例示を拾ってみる。第一例、「蝮の皮を乾かしたものとか、粉にした蜘蛛とか、蝙蝠の軟骨とかは、中世やルネサンス期のどの処方書にも、性的不能や種々の婦人病を治す薬として出ている。(The dried skin of a viper, pulverized spiders and bats' gristle appear in every medieval or renaissance prescription book as drugs to cure impotence and women's afflictions of one kind or another.)」[32]。第二例、「ティターニアの宮廷の妖精たちは、豆の花、蜘蛛の巣、蛾、芥子の種などと呼ばれている。(Titania's fairies are called; Pease-Blossom, Cobweb, Moth, Mustard-Seed.)」「わざわざこういった名前が選ばれたことを考えてみるだけで、それらが実は魔女の媚薬の成分にほかならないことがわかるはずだ。(However, one has only to speculate on the selection of these names to realize that they belong to the same love pharmacy of the witches.)」[33]。

第三例、「オーベロンは、罰としてティターニアを獣と寝るはめにしてやると、公然と言う。この場合にも、動物の種類の選び方には甚だ特徴がある。とりわけ、次に引用するオーベロンの脅し文句に現れる一連の動物など――それが山猫であれ、猫であれ、熊であれ、豹であれ、またこわ毛の猪であれ――(第二幕第二場)。これらの動物はすべて、豊かな性的能力を表わしている。(Oberon openly announces that as a punishment Titania will sleep with a beast. Again the selection of these animals is most characteristic , particularly in the next series of Oberon's threats: ―Be it ounce, or cat, or bear,/ Pard or boar with bristled hair―) (II, 2). All these animals represent abundant sexual potency,)」「ボトムはやがて驢馬の姿に変えられる。この悪夢に満ちた夏の夜においては、驢馬は通常の場合のように愚鈍さを象徴するのではない。古代からルネサンスまで、驢馬という動物は、最も強い性的能力を持っていると信じられていたのであり、あらゆる四足獣のなかで一番長く一番堅い男根を持つと信じられていた。(Bottom is eventually transformed into an ass. But in this nightmarish summer night, the ass does not symbolize stupidity. Since antiquity and up to the Renaissance the ass was credited with the strongest sexual potency and among all the quadrupeds is supposed to have the longest and hardest phallus.)」[34]。

動物的エロティシズムの舞台装置のなかで展開されるティターニアとボトムの交情の様相を、シェイクスピア原典とコット翻案とから一つずつ示してみる。

"Titania ―― Come, sit thee down upon this flowery bed,
While I thy amiable cheeks do coy,

31) Kott, ibid. pp.180-181. 前掲訳書218頁。

32) Kott,ibid.p.181. 前掲訳書219-220頁。『夏の夜の夢』には、ここに登場する三種の生物が、〈The dried skin of a viper, pulverized spiders and bats' gristle〉というコットの書いた通りの形では現れていない、と考えられる。「蜘蛛(spider)」は「巣造り蜘蛛めら、ここへは来るな(Weaving spiders, come not here)」(第2幕第2場、シェークスピア著・坪内逍遥訳、前掲書85頁)という形で、「蝙蝠(bat)」は、「鉛の脚を運び蝙蝠然たる翼を拡げて忍び寄って来よう(With leaden legs and batty wings doth creep)」(第3幕第2場、同前書92頁)という形で、現れている。それに対して「蝮(viper)」の語だけは見出せない。見出せるのは、「蛇にだって、蝮にだって、其位ゐの事が出来なくってさ(Could not a worm, an adder do so much?)」(第3幕第2場、同前書89頁)というように、「蝮(adder)」の語である。

33) Kott, ibid. p.182. 前掲訳書220頁。

34) Kott, ibid. pp.182-183. 前掲訳書220-221頁。

And stick musk-roses in thy sleek smooth head,
And kiss thy fair large ears, my gentle joy.”

――――――

Sleep thou, and I will wind thee in my arms.
So doth the woodbine the sweet honeysuckle
Enrings the barky fingers of the elm.
O, how I love thee! How I dote on thee!”

「ティターニア ――――――

さァさ、此花床へお掛けなさいね、
さうだとわたしお前さんの其好いたらしい頬を撫でてあげたり、
其滑々（すべすべ）したお頭（つむ）に麝香薔薇（じゃかうばら）を刺してあげたり、
其大きな耳を接吻してあげたりするわ、嬉しい好きな人。

――――――

ぢゃ、お眠（ね）、わたしお前さんを両手で抱擁（だっこ）してあげるから。
ま、如是（こんな）風に昼貌（ひるかほ）と美しい忍冬（すひかづら）とが
温雅（おとなし）く絡（から）み合うのよ、
ま、如是風に楡の木の皮ばった枝へ女蔦（めづた）の蔓が纏棉（まつは）るのよ。
あゝ、真個（ほんと）に可愛いことね！真個にわたし惚惚するわ！」[35]。

この場面を、コットは描写する。「細くたおやかで叙情的なティターニアが、動物の愛を求める。バックとオーベロンは姿を変えられたボトムを怪物と呼ぶ。弱弱しく優しいティターニアが、この怪物をほとんど力ずくで、まるで暴行を加えるようにベッドへ引っぱって行くのだ。これこそ彼女が求め、夢見ていた恋人なのである。（The slender, tender and lyrical Titania longs for animal love. Puck and Oberon call the transformed Bottom a monster. The frail and sweet Titania drags the monster to bed, almost by force. This is the lover she wanted and dreamed off;）」。「もはや美醜の別はなく、ただ溺愛と解放があるだけの性の暗黒界を、ティターニアは、この劇の登場人物の誰よりも深く、極め尽くすのである。（Of all the characters in the play Titania enters to the fullest extent the dark sphere of sex where there is no more beauty and ugliness; there is only infatuation and liberation.）」[36]。

流通必要貨幣量の観念

商品を買うには貨幣が必要であるとは、商品経済の世界では（頑是ない赤ん坊を別として）誰でもが知っている事実である。その認識の延長上で、多少の思慮を巡らせれば、次のようなことも誰にで

35）シェークスピア著・坪内逍遥訳、前掲書93頁。
36）Kott,ibid.p.183. 前掲訳書221-222頁。

も理解されることである。すなわち、貨幣は何時でも何処でも如何なる商品でも購入できるのに対して、商品は何時でも何処でも貨幣に交換できるとは限らないという事実である。「販売を予定されている物品すなわち商品（ein zum Verkauf bestimmter Artikel, eine Ware）」、「売るための財貨つまり商品（Goods for sale, commodities）」としては、売れない可能性、売れ残る可能性は、商品の「生命」に関わる重大事である。売れ残ったのでは、価値が実現されないだけでなく、使用価値も実現されないわけで、全く意味を失うことになるのだから。貨幣による商品の購買の確実性に対する商品の販売の不確実性＝貨幣への転化の困難性は、商品経済社会に生まれ育った成人ならば、誰知らぬ者のない極めて顕著な事実である。

商品に対する貨幣の優位性、貨幣に対する商品の劣位性、総じて言えば貨幣と商品の優劣関係という顕著な事実について、卓越した洞察力を発揮して、その理論的根拠を解明したのがマルクスだった。『資本論』第１巻第１章第３節「価値形態または交換価値」と第２章「交換過程」とにおいて展開される価値形態論において、商品形態からの貨幣形態の分化発生とともに、貨幣の有する商品に対する「直接交換可能性」の形成が解明される。続く第３章「貨幣または商品流通」において、商品から分化発生した貨幣の機能とそれに基づく商品の流通が解明される。その第２節「流通手段」は、三つの項から構成されている。すなわちａ項「商品の変態」、ｂ項「貨幣の通流」、ｃ項「鋳貨、価値章標」である。その第一の項「商品の変態」において、マルクスは「商品の命懸けの飛躍」と題して、「一、商品の売れない可能性」、「二、売れるとしても実現価格が予定価格を下回る可能性」について例示を以て詳述する。概括すれば、第１章第３節と第２章において貨幣の優位性の根拠を明らかにするとともに、第３章第２節ａ項において貨幣に対する商品の劣位性を例示したのである。

そのような商品と貨幣を巡る非対称性を解明したマルクスの理論的道筋を辿った眼で見ると、信じがたい光景が、第３章「貨幣または商品流通」第２節「流通手段」ｂ項「貨幣の通流（Die Umlauf des Geldes）」[37] の中ほどに待ち受けている。以下に引用する、商品と貨幣の優劣関係を逆転した見地からの議論、そしてそれに基いて流通必要貨幣量の観念が作られる議論に遭遇することになるのである。

「諸商品が、われわれになじみの商品変態列、すなわち１クォーターの小麦 ── ２ポンド・スターリング ── 20エレのリンネル ── ２ポンド・スターリング ── １冊の聖書 ── ２ポンド・スターリング ── ４ガロンのウィスキー ── ２ポンド・スターリングという列の諸環をなすとすれば、２ポンド・スターリングがいろいろな商品を順々に流通させていくことになる。というのは、それは諸商品の価格を順々に実現して行き、したがって８ポンド・スターリングという価格総額を実現してから、最後にウィスキー屋の手のなかで休むからである。それは４回の通流を成しとげる。この同じ貨幣片による繰り返される場所変換は、商品の二重の形態変換（一方からは商品－貨幣という販売、他方からは貨幣－商品という購買―引用者）を表し、二つの反対の流通段階を通る商品の運動を表し、またいろいろな商品の変態の絡み合いを表している。この過程が通る対立していて互いに補い合う諸段階は、空間的に並んで現れることは出来ないのであって、ただ時間的に相継いで現れることが出来るだけで

37）Marx, a.a.O. S.128. 前掲訳書204頁。岡崎訳書では、Die Umlauf des Geldes は「貨幣の流通」と訳されている。ここでは Die Zirkulation「流通」と区別して、「貨幣の通流」の訳語を用いる。

ある。ぞれだから、時間区分がこの過程の長さの尺度になるのであり、また与えられた時間内の同じ貨幣片の通流回数によって貨幣通流の速度が測られるのである。前記の４種の商品の流通過程に、例えば１日かかるとしよう。そうすると、実現されるべき価格総額は８ポンド・スターリング、同じ貨幣片の１日の通流回数は４、流通する貨幣量は２ポンド・スターリングである。すなわち流通過程のある与えられた期間については、〈諸商品の価格総額／同名の貨幣片の通流回数＝流通手段として機能する貨幣の量〉となる。この法則は一般的に妥当する。与えられた期間における一国の流通過程は、一方では、同じ貨幣片がただ一度だけ場所を変え、ただ一回通流するだけの、多くの分散した、同時的な空間的に並行する売り（または買い）すなわち部分変態を含んでいるが、他方では、同じ貨幣片が多かれ少なかれ何回もの通流を行うような、あるいは並行し、あるいは絡み合う、多かれ少なかれいくつもの環から成っている変態列を含んでいる。とは言え、通流しつつある同名の貨幣片の総通流回数からは、各個の貨幣片の平均通流回数または貨幣通流の平均速度が出て来る。例えば一日の流通過程のはじめにそこに投げ込まれる貨幣総量は、同時的に空間的に並んで流通する諸商品の価格総額によって当然に規定される」[38)]。

この引用部分で、最も大きい問題となるもの、したがって検討の対象として最初に取り上げられるべきものは、〈諸商品の価格総額／同名の貨幣片の通流回数＝流通手段として機能する貨幣の量（Preissumme der Waren / Umlaufsanzahl gleichnamiger Geldstücke ＝ Masse des als Zirkulationsmittel funktionierenden Geldes.)〉という等式に関わる理解、「例えば一日の流通過程のはじめにそこに投げ込まれる貨幣総量は、同時的に空間的に並んで流通する諸商品の価格総額によって当然に規定される（Die Geldmasse, die bei Beginn z.B. des täglichen Zirkulationsprozesses in ihn hineingeworfen wird, ist natürlich bestimmt durch die Preissumme der gleichzeitig und räumlich nebeneinander zirkulierenden Waren.)」という理解である。就中、「貨幣総量は、流通する諸商品の価格総額によって規定される」というところに問題の急所がある。この見地に立てば、上の等式は、左辺諸商品の価格総額によって右辺の「流通手段として機能する貨幣の量」が決定されることになり、流通する商品額によって流通に必要な貨幣量が決定されるという流通必要貨幣量の観念が生じることになるわけである。

このような理解は、その核心部分を圧縮して表現すれば、商品流通（商品の動き）が貨幣通流（貨幣の動き）を規定するということになる。この見解は、前述した商品経済に特有の顕著な事実、貨幣による商品の購買の確実性に対する商品の販売の不確実性＝貨幣への転化の困難性、つまり貨幣の商品に対する優位性という事実に反するのではないか。貨幣の商品に対する優位性の根拠を解明した「貨幣の直接交換可能性」論、商品の貨幣に対する弱い立場を適切に表現した「商品の命懸けの飛躍」論に背馳するのではないか。そういう大きな疑問が浮上するわけである。

そういう疑問に満ちた見解を、第３章「貨幣または商品流通」第２節「流通手段」b 項「貨幣の通流」において、マルクスは、次のように、二度三度と繰り返している。

「要するに、それぞれの期間に流通手段として機能する貨幣の総量は、一方では、流通する商品世界

38）Marx, a.a.O. S.133-134. 前掲訳書211-213頁。

の価格総額によって、他方では、商品世界の対立的な流通過程の流れの緩急によって、規定されているのである。」[39]。

「流通手段の量は、流通する商品の価格総額と貨幣通流の平均速度によって規定されているという法則は、次のようにも表現される。すなわち、諸商品の価格総額とその変態の平均速度とが与えられていれば、通流する貨幣または貨幣材料の量は、それ自身の価値によって定まる、と。」[40]。

マルクスの非凡と平凡

Man sieht, die Ware liebt das Geld, aber „the course of true love never does run smooth".
人が知るように、商品は貨幣を恋い慕う、だが「真の恋が滑らかに進んだためしはない」。

貨幣は何時でも何処でも如何なる商品でも購入できるのに対して、商品は何時でも何処でも貨幣に交換できるとは限らないということ、縮言すれば、貨幣による商品の購買の確実性に対する商品の販売の不確実性＝貨幣への転化の困難性、さらに圧縮すれば、商品と貨幣の非対称性、これは商品経済社会に生涯を浮かべる成人が誰でも知っている極めて顕著な事実である。そして、直接に人間の生活を支える物品としての商品が、直接には人間の生活欲求を充足する力を持たない貨幣に対して劣位を余儀なくされることは、商品経済社会およびその極点としての資本制社会の顛倒性を示す悲しい事実でもある。

この顕著にして悲しい事実は、疑いの余地のない厳然たる事実である。この事実の存在根拠をマルクスは、「貨幣の直接交換可能性」論と「商品の命懸けの飛躍」論を以て解明に努めている。マルクスの非凡な洞察力の発揮された場面だと言える。その非凡な学識の表現が、「商品」と「貨幣」を擬人化した『夏の夜の夢』からの引用であった。商品の貨幣に対する劣位性を、商品の恋慕あるいは片思いとして、商品は貨幣を恋い慕う、だが「真の恋が滑らかに進んだためしはない」と喝破したのである。

筆者は、以上の如くマルクスの非凡を高く評価するのである。それ故に、その同じマルクスが、第３章「貨幣または商品流通」第２節「流通手段」b 項「貨幣の通流」のなかで展開する、商品と貨幣の優劣関係を逆転した見地からの議論、そしてそれに基いて流通必要貨幣量の観念が作られる議論については、これを疑問として否定的見解を抱かざるを得ないのである。

四半世紀近い以前のことになるが、筆者は、この誤れるマルクス見解を次のように批評している。「商品と貨幣とを対置してその力の優劣関係を見るならば、貨幣の側に軍配を挙げざるを得ない。W－G（W＝商品、G＝貨幣）の形で表される商品の側から言えば販売、貨幣の側から言えば購買において、この運動は商品所有者の決断によって実現されるわけではない。商品の所有者は彼の商品の販売を切実に望みその実現のために奔走するが、しかし自らの力でその実現を決定付けることは出来ない。貨幣所有者の決断によって購買が実現され、同時にその裏面として販売が実現されるのである。商品

39）Marx, a.a.O. S.135. 前掲訳書215頁。
40）Marx, a.a.O. S.136－137. 前掲訳書217頁。

の販売と貨幣による購買を取り上げて、どちらが原因でありどちらが結果であるかと問われるならば、貨幣による購買が原因で商品の販売はその結果だと言っても不都合はないであろう」[41)]。

商品に対する貨幣の優位性、貨幣の主導性の見地に立脚すれば、「一日の流通過程のはじめにそこに投げ込まれる貨幣総量は、同時的に空間的に並んで流通する諸商品の価格総額によって当然に規定される」という先述のマルクスの見解が平凡な誤解に過ぎないことが容易に判明する。「いま誰かが財布から或いは金庫から貨幣を出して、或る商品を買い求めると想定しよう。それまで蓄蔵手段として休息していた貨幣が、今度は購買手段として機能し流通手段として機能するが、それと引き替えに商品所有者の手から貨幣所有者の手へと確実に商品が渡される。それと同時に、商品の取引量が増加するから、（価格は一定であっても）流通する『諸商品の価格総額』は増加することになる。逆に、或る企業が工場から商品を積み出して貨幣に交換しようとしても必ずしも売れるとは限らないのであって、商品の取引量をも、『流通手段の量』をも、自らの力で増大させうる保証はないのである。商品の動き（あるいは商品流通）が貨幣の動き（あるいは貨幣通流）を決定する、という（第３章第２節ｂ項におけるマルクスの）見解が必ずしも妥当しないことになる」[42)]。

非凡な能力を有するマルクスが、なにゆえにこのような平凡な過ちに陥るのか、その謎に簡単に言及することで、小稿を結ぶこととする。註17）として引用した次の文章に謎を解く鍵が潜んでいる。「社会的分業は彼の労働を一面的にするとともに、彼の欲望を多面的にしている。それだからこそ、彼にとって生産物はただ交換価値としてのみ役立つのである。しかし、彼の生産物はただ貨幣においてのみ一般的な社会的に認められた等価形態を受け取るのであり、しかもその貨幣は他人のポケットのなかにある。それを引き出すためには、商品は何よりもまず貨幣所有者にとって使用価値でなければならず、したがって商品に支出された労働は社会的に有用な形態で支出されていなければならない」。

ここでは、「貨幣においてのみ一般的な社会的に認められた等価形態を受け取る」こと、「その貨幣は他人のポケットのなかにある。それを引き出すためには、商品は何よりもまず貨幣所有者にとって使用価値でなければなら」ないことが、つまり貨幣所有者の需要との適合の必要が、商品の販売の困難性の原因であると正しく認識されている。この正しい認識の基盤を成している見地、本稿第２節「商品と貨幣の優劣関係」で指摘した「商品の内在的対立矛盾」の見地（「商品は、使用価値としては、それぞれに異質であり、量的に比較し得ないものであって、相互の交換を制約するものとして存在している。それとは対照的に、価値としての商品は、第一義的に、何時でも何処でも如何なる商品とも交換されることを求める存在である。この点で、商品の価値と使用価値は、対立し矛盾する関係にある。このような商品の内在的対立矛盾こそが、交換を切実に求めつつ容易に交換を実現できない基本的理由を成している」という見地）が、より重視されるべきだったと考えられる。残念なのは、商品の販売の困難の原因として社会的分業の存在が重視されたために、「商品の内在的対立矛盾」の見地が充分に生かされなくなったことである。

貨幣の商品に対する優位性、商品の販売の困難性、それを象徴したシェイクスピアからの引用、そ

41）福留久大「マルクスと信用創造論」（九州大学教養部『社会科学論集』第34号＝最終号、1994年刊）、（43）頁。
42）前掲拙稿「マルクスと信用創造論」（44）頁。

の一文の次の文節で、マルクスは、そこまでの議論の前提を一八〇度回転させる宙返りの荒業に突き進む。「分業は、労働生産物を商品に転化させ、そうすることによって、労働生産物の貨幣への転化を必然にする。同時に分業は、この化体が成功するか否かを偶然にする。とは言え、ここでは現象を純粋に考察しなければならず、したがってその正常な進行を前提しなければならない。そこで、とにかく事が進行して、商品が売れないようなことがないとすれば、商品の形態変換は、変則的にはこの形態変換で実体―価値量―が減らされたり加えられたりすることがあるにしても、常に行われているのである」[43)]。

マルクスにおいて、商品の販売の困難の原因として本来的には、「商品の内在的対立矛盾」の見地が十二分に重視されねばならないところだった。だが、第３章第２節のマルクスは、社会的分業論の介入によって、分業の存在を商品販売の困難の原因として重視することになった。そのために、社会的分業が調和的に進行すれば商品販売の困難も解消されるかの如く平凡な誤解に陥って仕舞うことになった、と考えられるのである。マルクスのここでの誤解は、経済学の世界に大きな禍根を残す結果となっている。その件に付いては、稿を改めて論及したいと思う。

〔九州大学名誉教授〕

43）Marx, a.a.O. S.122. 前掲訳書194-195頁。